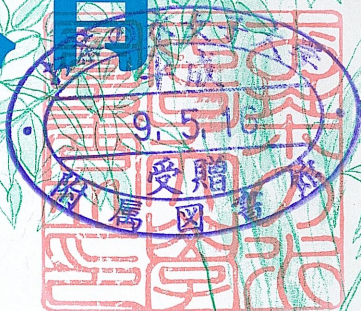


幼児の教育

家庭-保育所-幼稚園

'97年 7月号



伴奏なんかこわくない

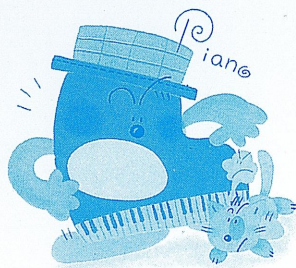
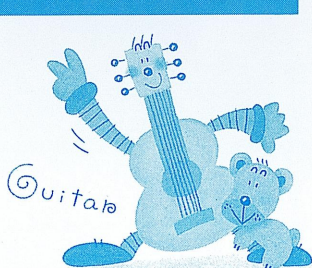
あそび歌からはじめるピアノ、ギター伴奏術



新刊



楽器の扱いが苦手の保育者向け。
ピアノ、ギターなどこれ一冊を
マスターすれば、いろいろな曲
が簡単に弾け、ほとんどのあそ
び歌の伴奏ができるようになる。



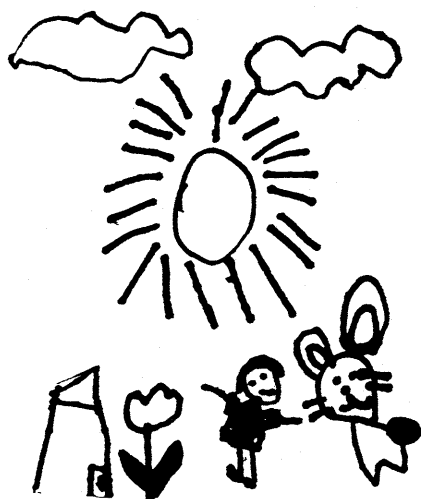
繁下和雄 著

B5判 96頁 定価 本体2,200円+税

キンダーブックの
フレーベル館

幼児の教育

第96巻 第7号



幼 児 の 教 育 目 次

——第九十六卷 第七号——

© 1997
日本幼稚園協会

ある日……………(4)

二十一世紀にむけて幼児教育を考える(13)

具体的体験世界の中での人間形成を……………小川 博久…(6)

「児童の世紀」を振り返る ―その二―……………本田 和子…(11)

子どものいる暮らし ―男・夫・父 父親失格?……………山本 政人…(20)

子ども時代と私(7)

私の中学生時代 ―戦時中の三年間(1)……………湯沢 雍彦…(26)



ある日の育児日記から(79).....佐藤 和代...(33)

幼児期の水遊びと大人になってからと.....津守 真...(34)

あそびはらっぱものがたり.....すとうあさえ...(38)

震災後の子どもたち(17) ゆさぶられても地に足つけて.....穴井 重行...(45)

「シンデレラ」を読み替えること.....渋谷 真樹...(52)

子どもの視線.....上坂本絵里...(58)

表紙絵／小田原千佳子

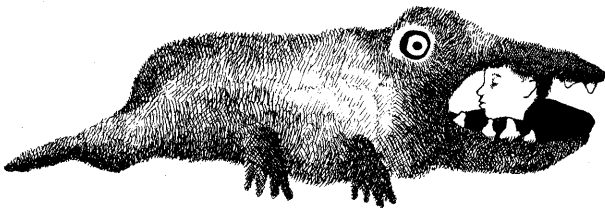
扉題字／津守 真

扉カット／お茶の水女子大学附属幼稚園園児

カット／彌永たたえ「動物とおさんぽ」

編集委員／田代 和美・伊集院 理子・上坂元絵里

編集部／仲 明子



ある日





撮影・平野 清

二十一世紀にむけて幼児教育を考える(13)

具体的体験世界の

中での人間形成を

小川 博久

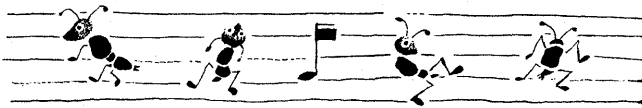
J・ピアジェが子どもの発達について多くの業績を発表し、子どもの発達には、一本の筋道のようなものが普遍的に存在するといった信念が、つい二十年程前まで教育心理学者のみならず、多くの幼児教育関係者にも広く行き渡っていた。しかし、今や、ブルーナーやコールらの研究を端緒として発達はリニアな一本の筋からなっていると、いう信念は、失われつつある。またフィリップ・アリエス、N・ポルトマンなどの研究も子ども期が確固たるものをして存在するという信念をゆさぶっている。また、教



育学の分野では、ポスト・モダンといわれる研究が、既成の学校教授学を基本とする教育学の啓蒙的規範性を批判し、学校それ自体の機能を当然視するこれまでの教育研究の問い直しを迫っている。

しかし、こうした変化を声高に云々するのは、学者や評論家と称する人々で、現実の学校生活や幼児の園生活のリズムや期間計画や年間計画はほとんど変りはないかのようである。学校や幼稚園の生活が、まわりを中心とした考え方で厳密な時間区分の中で展開され、三歳から五歳までの保育活動は、三歳用、五歳用と、おとなの決めた活動を幼児にやらせるといふ形で決定しており、三歳の十月と四歳の十月とは、同じであってはならないという信念で行なわれている。また、一般の社会生活では日々影がうすくなっている民間の年中行事の中で園生活だけが園行事に追われる日々になっていることが多く一斉に幼児を参加させ、適応させる。これへの父母の支持も高い。その活動に「ついていけない」といわれたら、それは、その年齢にふさわしくない状態にあるがゆえに、「発達の遅れ」と称されたり、大多数の幼児から逸脱したという理由で「社会性」が欠如しているとされたりする。こうした実践も決して少なくはない。

また家庭では、幼児たちの降園後の生活は時間刻みに拘束されることも多い。学習塾やおけいこごとに行くことがほぼ三人に一人はいる。ここでの活動プログラムは、



幼稚園よりもさらに一本の「発達」と称するラインに沿って評価され、「有能である」「ない」の区別は鮮明である、今や二十年、三十年前の幼児の生活の余裕はなくなっている。しかも、多くの親たちは、それを当然のことのように幼児たちに求める。それは幼児たちがそうしたいといっているからあるいはかくれた才能がみつかるかもしれない、という理由で。

一方、社会に目をむけると、この二十年間を見ただけでその変化は目に余る程だ。まず、幼児の保育を担当するおとなを含め、おとなたちのくらしが変った。職場における年功序列は崩れつつある。年配者よりも、若い世代の方がパソコンの利用率は高い。男性の方が女性より優れているという前提は神話に過ぎなくなってきた。夫婦別姓も当然視され、男性が一般的に育児休暇を取る日も近い。

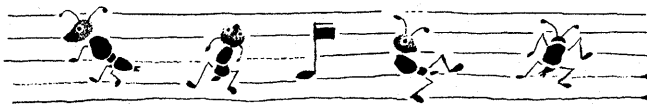
一方、文化の面でも既成の価値序列は崩壊の予兆をみせている。あらゆるスポーツに女性が進出し、男女差を個人差におき変えている。自衛隊への女性の進出も著しい。男女が好む世界もモノセックス化している。漫画、園芸、ジャーナリズム等々、送り手も受け手も男女の差はなくなりつつある。

一方、世代的秩序はどうか、前述のパソコンの利用にみられるように、年齢の差が、地位、財力、能力差を生むという神話を裏切る現象もじわりくと増大している。長幼の序という言葉が死語になる日も近いかもしれない。日本社会の高齢化は、



老人問題を社会のお荷物ととらえる価値観を内包しつつある。中年層にとって老人と生活の共有を回避したい気持ちは強い。老人の在宅介護をできれば公的施設に肩替りしてほしいという想いは強い。特に十代の見る年齢層へのまなざしは、「政治」「演歌」など成人の世界に無関係で若人文化のみを価値あるものとする傾向を生んでいる。

こうした現象は、よきにつけあしきにつけ、時代の流れとして受けとめざるをえない。同時にそれは、人間が幼児期から次第により高次の生きるための価値に向って上昇するという発達観の潜在的前提を支える社会的基盤を序々に切り崩しつつある。その結果、直線的に上昇する発達観は、学校変化にのみ存続する神話となっていくだろう。その結果、学校教育を受けている間は、その神話に呪縛されながら、巷に出たたんそれからの解放を志向することになる。若者たちは大衆文化の中で発達序列のニッチ（生態学的生存位置）からの解放を主張しながら、学校文化の中で、その強い拘束にしばられつづけていくことになる。そして社会に出れば、学校文化を支配する発達観の中で自分の位置（生態学的位置ニッチ）を宿命的に受けとめながら、それが貨幣価値に置き替るといふ現実、またこの現実を乗り越えるのも貨幣価値であることを実感している。ブランド志向はその象徴である。援助交際もこの現実からの容易な脱出かもしれない。



こうしたニッチに拘束されているという現実のトラウマは、結婚しても子育てはいやだ、子どもはほしくないという傾向を生むことも当然考えられる。このトラウマは生んでしまった子育てにも影響し、他者依存の子育て状況をつくることにもなる。保育者を志向する若い世代が未だ少なくないが、彼女たちの動機はおとなの対極にあると考える。「純真無垢」な存在としての子どもである。だから現実には裏切られたと感ずることも少なくない。

こうした見方は、時代の変化として引き受けなければならないとしても、二十一世紀を迎えて乗り越えるべき課題を提示する。それは、男女の問題、世代間格差の問題、発達観の問題に共通する“観念的に抽象化された人間観”である。日常生活の感情の交流を前提としない人間観である。今、始めるべきは、世代を越えて、日常生活の雑事を一つ／＼大切にすることでお互いを感じあう具体的体験である。人ひとりひとりを皮膚感覚で共有し合う体験だ。その基礎体験の場が幼児期にある。幼児教育の課題もそこにしかない。

(東京学芸大学)



「児童の世紀」を振り返る

——その二——

本田 和子

科学の時代とその「落とし子」

よい結婚がよい生殖行為に連なり、その所産として生み出される「良質な子ども」こそが、来るべき世紀の希望である。そのために、結婚の法的根拠は

意味を持たず、法律的には未婚者であっても、優れた子どもを出産し、育成し得る母体の機能こそが活用されるべきである。一九世紀の女権運動や婦人労働運動を批判し、「母性保護」を強調したエレン・ケイの主張は、こう要約されるとき、消極的優生学と

積極的優生学の混合体であると気付かされよう。すなわち、結婚制限や断種による人種改良へと展開する消極的優生学と、望ましい遺伝子同士の結合を奨励する積極的優生学が、彼女の中で矛盾なく結合し、楽天的とも言える独得の生殖観・結婚観、そして出産観、延いては子ども観を出現させているのである。

エレン・ケイの依拠した「優生学」が、社会ダーウィニズムの申し子であることは言を待たない。先にも触れたように、一八五九年暮れに出版された『種の起源』は、キリスト教への帰依によって成り立っていた安定した意味世界に亀裂を生じさせ、従来の倫理の基盤や人生の指針、あるいは日常の細々した規範などを崩壊させる危険な引き金として機能した。その結果、新しい規範として登場したのが、人間社会を自然科学的に解釈しようとする哲学的傾向であり、とりわけ、ダーウィンの原理をとおして

理解しようとする「社会ダーウィニズム」だった。

一九世紀末から今世紀初頭にかけて欧米社会に流行した社会ダーウィニズム、それが意味するのは、当時の人々が、人として生きて



いくために新しい意味空間を必要としたこと、および、揺らぎ出した宗教的基盤や生活規範に代わって、それを打破した自然科学こそが、合理的で確実な新しい生き方の根拠と見えたであろうと言うことだ。エレン・ケイは、いとも明瞭にこのことを宣言している。「先ず考えなければならぬことは、自然科学をもつて教育学の基礎とせねばならないと同時に、またそれは法理学の基礎ともしなければならぬ」と……。とすれば、「優生学」は、生殖・妊娠・出産などの人間古来の行為

が、新しい科学主義的意味空間のなかに置かれたとき、それを語り変える新しい言葉だったと言うことになる。

「子どもを生む」という行為は、既に死語と化した「授かる」に代わって、現在は「作る」という言葉で語られていると言う。今世紀も終わりに近付いた今日、「優生学」は死語と化したとまでは言わぬものの、かつてのような社会的地位からは追われていく。ナチス・ドイツの異民族迫害の理論的根拠とされたという歴史もあって、それは、科学であるにまして忌むべきイデオロギーと解され、追放の憂き目を免れ得なかつたのであろう。

しかし、にもかかわらず、子どもを「作る」と捉える現代人の感覚は、優生学的観念と深い水脈を共有する。なぜなら、それは、妊娠や出産を、そして、生まれてくる小さい生命の誕生を、創造主の業とは無縁の人の力によるものとする人間中心的世界

観の反映であり、子どもの誕生を人為的操作の所産と見る点で、優生学的生殖観と同列にならぶからである。優生学も社会ダーウィニズムも、今世紀の王座に着いた「自然科学主義」の産物であつてみれば、「子どもを作る」と把握する現代人の感覚は、明らかに科学の時代の申し子である。おおよそ一〇〇年の歳月をかけて、子どもに対する私どもの感じ方は、その根っこのところどっぷりと科学の色に染め付けられてしまったのである。

それに、「子ども」は、いま、試験官で「作られる」ものとなりつつあって、人知を越えるかに見える生命誕生の神秘は、科学という無影灯のもとにその全貌をあらわにしようとしている。自然科学を神の座に据えた今世紀は、それを象徴する行為として、「子ども」の生命そのものを、「科学」という絶対者の操作に委ね始めたと言ふべきかも知れない。

「永遠の子ども」

——科学の時代の鬼っ子——の発見

科学の時代は、しかし、一方で奇妙な「子ども」を産出してゐる。経過する時間に抗し、進化の個体版たる「成長」とも無縁に、いつまでも「子どものまま」でい続ける不思議な存在の創出がそれである。たとえば、今世紀幕開きの一九〇二年に、イギリスで産声を上げた「ピーターパン」もその一人であった。

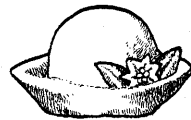
ロンドンのケンジントン公園のクリスマス劇の会場で、不思議な光景が出現していた。舞台上のピーターパン役の俳優が、やおら進み出て観客に呼びかけたのである。「あなた方は妖精を信じますか？あなた方が信じるなら、彼らは生き延びることが出来るのです」このとき客席から起こったのは、いっせいの拍手であった。一人二人と観客が立ち上がる。

そして、彼らは叫んだのであった。「信じるぞ、信じるぞも……」。しかも、立ち上がった観客の多くは、

既に子どもではなく、一人前の立派な紳士たちだったと言うのである。

このエピソードに関して、私には、その真偽を確かめる根拠がない。しかし、仮にフィクションにしても、こうした伝説が、真しやかに語り伝えられたところに、今世紀の隠された願望を読むことが出来る。すなわち、それは、科学が追放した「妖精」や「魔術師」など、伝統的なもろもろの不思議を子どもの世界に温存し、それを「信じる」という形で自身の内側に貯えこもうとする新しい心性であった。

ピーターパンが、ジェームズ・バリと呼ばれる作



家の筆から生み出された、物語の主人公であることは周知であろう。彼ビーターは、赤ん坊のときに鳥のように窓から飛び出し、「ネバーランド」という「どこにもない国」に住み着いて、「永遠の子ども」としての生を送る存在であった。流れ去らない時間のなかで、地図上のどこにも特定されない場所に住む……。彼は、まさしく「時計」と「地図」に支配される近代社会に対して、「ノン」を突き付けたのである。

日常的現実とは異なる「もう一つの世界」を意図的に産出し、そこに、日常的理性の否定した様々な現象を生起させる。こうした物語を、今世紀は「ファンタジー」と類型化して、児童文学の中心においた。そして、伝統的世界に跳梁した魔法の力、あえて言えば、「非科学的」あるいは「反科学的」の名の下に科学の時代が追放・抹殺を企てたもろろを、そのなかに封じ込めたのである。ファンタ

ジー・ランドでは、悪戯者の妖精や優しい仙女が活躍し、もの言う獣や小鳥たち、あるいは空を飛ぶ船など、ありとあらゆる不思議に生存権が与えられ、その健在ぶりが主張されたのである。

以後、今世紀のファンタジーは、多くの魅力的な主人公を生みだしてきた。なかでも、サン・テグジュペリの『星の王子さま』やエンデの『モモ』など、子ども読者にもまして多くの若者たち、大人たちに愛読された作品も少なくない。象を丸呑みにしたうわばみの絵を、素早く見破った星の王子さまは永遠の子どもの心の持ち主であったし、百年の余もこの世に生存したらしいのに、もじゃもじゃ頭で十歳くらいにしか見えないモモは、永遠の少女であった。星の王子さまの鈴を振るような笑い声は、作品中の飛行士を癒しただけでなく、本を手にした多くの大人読者を癒した。モモの活躍が、現代の救世主物語として読まれたことは、いまだ、私たちの記憶

に新しい。科学を中心に仰いだ今世紀のまなざしは、こうした「永遠の子ども」たちに対して、一方ならぬ熱い視線を注いだのであった。

もう子どもではない人々が、成長と無縁の主人公たちの生き方に満腔の賛意を表す。このことが物語るのは、経過する時間のなかでいやおうなしに年齢を重ね、生物的存在としての自己身体の滅亡へと究極的な歩みを急がされる人々が、老いることも死ぬこともない理想境を、自身の内部に設定しようとする無意識の希求ではないか。トーマス・モートルトは、その「ピーター・パン評」において次のように語っていた。すなわち、ジェームス・バリにとっての芸術とは、「逃げ出したくなったり、遠くに行ってしまうとき、またあの最高の羨望の的たる永遠の青春、「不老不死の国」に行きたいときに、いつでも、われわれ人間の目の閉ざされた窓を……こうして……開いてみせることである」と……。科学

に支配された産業主義の時代に、それらから隔離された安らぎの故郷を内側の世界に求める。永遠の子ども主人公やその活躍の場の創造、こうした営みの意味するものは、「懐古趣味と逃避以外の何ものでもない」という、ピーター・パンや星の王子さまを巡るこうした酷評も、ある一面を指摘し得ていると評価されてしかるべきかも知れない。

「子ども」に関する巨人たちの言説

優生学的に操作され理想の人類へと改良の歩を進める子どもが外部に想定されたとき、進歩や成熟を拒否した永遠の子どもが内部に発見される。二〇世紀とは、小さい人たちの上に、こうしたアンビバレ



ントな徴付けを試みた時代であった。

ところで、こうした彼らのありようをめぐる、それを、刺激的な言葉で位置付けようと試みた巨人たちが既に出現していた。前者、すなわち、子どもに人類の理想を見る代表的な一人として、エレン・ケイも傾倒していたニイチェを上げることが出来る。

ゴルトンの「優生学」に全面的に依拠した彼女は、同様の思想の所有者として、ニイチェに言及する。たとえば次のように……。「ニイチェがその〔超人〕の思想の根拠を直接ダーウィンにおいていたというのではないが、またダーウィン自身そのような思想を予期していたのではないが、なおしかしニイチェの思想はダーウィンの思想の一大結果たるを失わない。ニイチェほど強烈に、現在の人類は単に動物と〔超人〕との間をつなぐ橋梁に過ぎないのだと確信したものはない。そこからニイチェ

は、人種改善に対する人類の義務をば、ゴルトンに劣らず極めて厳肅なものと見た。ただ彼は、この主張を表白する科学的証明をもつてしないで、詩的表白、予言的表白の力をもつてしたのである。」

そして、エレン・ケイは、両親に関する真の予言的・詩的言説として、ニイチェの次の言葉を引くのである。

「汝の真の勝利もまた汝の解放もすべて子供のために求められるものであることを余は希望する。汝の勝利のために汝の解放のために汝は生きた記念碑を建てねばならぬ。

汝は汝自身よりも更に高く、高く高く、建てねばならぬ。されど余は、汝の先ず汝自身を正しき基礎正しき心身にまで作らんことを望む。

見よ、汝自身をとおして人類の進歩するのを、単に継続するのではなく進歩するのを。

真の結婚をしてこの目的に進む汝の補助たらしめ

よ。

汝は汝よりも一層高揚せる人類を造らねばならぬ。自ら廻る車輪の如く自発力を有する人類を造らねばならぬ。創造の活力そのものを汝は造らねばならぬ」

この引用文は、いま生きる自分を超えて高く建てられる生きた記念碑が子どもである、と、高らかに謳い上げていて、彼女の魂を震わせたであろうことが推察される。確かに、ディオニュソスの美と力を価値の源泉に求めたニイチェは、「児童の世紀」の出現を側面から推進した思想家として、光を当て直すことが可能であろう。

ニイチェは、しかし、「児童の世紀」の展開を見ることなく、一九〇〇年に薨じた。その同じ年に、大著『夢判断』を世に送り、さらに一九〇五年の『性欲論三篇』によって、幼児期体験に分析の光りを当てその意味を強調して、人の生涯における「乳

幼児期」の位置付けを明確

化したのが、他ならぬG・

フロイトであった。彼の

「幼児性欲とその段階的発達論」に、一九世紀末を震

撼させた進化論の影響を見

ることは容易である。より

ストリートに、進化論的発想を下敷きにして構築された人格発達の理論と読むことも可能だろうか。臨床医として小児の症例と直面し、小児神経病学の第一人者と称された彼が、その症例論の集大成に際してその基盤に進化論を据えたことは、どのような巨人と言えども、時代の知的パラダイムから無縁ではあり得ないことを示唆している。

ところで、フロイトの提唱した意識下の幼児体験とは、もう子どもではない人々の内部に「子ども」の存在を指摘する言説でもあった。自分の内側に子



どもだった自分が任んでいて、それが、さまざまに悪戯をし、現在大人である自分に相応しからぬ言動を強いる。フロイト理論を単純化してこう解釈するなら、それは、文学や芸術の世界に跳梁し始めた「永遠の子ども」たちとある種の親和関係を結び始める。すなわち、内に住み着いた「子ども」は「永遠に子どもの」であり続け、大人との間に強い違和感を表明し異義申し立てをし続けるらしい。そして、作品の主人公たちは、「内なる子ども」に忠実に、成熟を拒否し大人などという厄介なものになることを回避した人物とすることになる。ピーターパンも星の王子さまも、あるいはその他の誰それも、すべて「内なる子ども」の求めのままに、大人になることを止めて子どものままに生きることを選んだのだ。

したがって、精神分析学者たちがこれら物語を評するとき、大方が批判的、時に酷評的ですからあつ

て、その作者に対しては、さながら小児神経症例に對するような人格分析が行われる。しかし、クリスマス劇で大人の観客が拍手を惜しまなかったこと、また、『星の王子さま』に熱い涙を注ぐ若者の存在がいまだに後を断たないことは、今世紀が発見した「内なる子ども」の存在が、依然、無視し得ぬものであると告げているように思われる。

(聖学院大学)

子どものいる暮らし―男・夫・父

父親失格？

山本 政人

この四月から長男は小学生である。早いものだと思う。いつの間にか大きくなっていったという感じである。

振り返ってみると、大げさだが「よく生きていた」と思う。小さい頃からぜんそくがひどく、一歳のときから何度か入院し、現在もとき

どき通院している。三歳頃までは毎日のように発作が起き、朝晩二度吸入し（妻がやっていた）、風邪をひくとまた入院かとびくびくした。だんだん慣れたが、ぜんそくに加えて自家中毒であることもわかり、妻の苦勞も並大抵ではなかったと思う。

私は心配だけは人一倍したと思うが、妻の代わりに子どもの面倒を見ることはほとんどなかった。仕事とかいろいろ理由はあるが、最大の理由は子どもが私ではなく母親を求めた（と私が感じた）ためである。

入院したとき、母親が何かの用でそばを離れると、子どもは「ママ、ママ」と不安そうに母親を求めた。私は正直たまらなかった。私がそばにいても全然子どもの支えになっていないのである。頼りにならない父親。私にはこのことが一種のトラウマになった。そして知らず知らず子どもと距離をとっていた。子どもの病気に慣れたというより、それを傍観者の見つけるようになった。そうしなければ耐えられなかったともいえる。子どもが苦しそうにしているのを、ただ見ていることしかできなかったのである。

長男は言葉が遅かった。病気がちなため、外に出ることも少なかった。もっぱら家でビデオを見たり、電車のおもちゃで遊んだりという生活では無理もないと思った。それでも三歳で二語文が出ていたので、あまり心配はしなかった。というより、言葉よりも身体のこと、心配だった。私は長男を「こわれやすいガラス細工」のように思っていた。母親はそんな感じ方はしなかったはずだ。長男は病気をかかえず、それなりに強く育っていた。しかし私はそ



れを実感することができず、子どもがか弱い、危ういものとしか感じられなかった。私の方が「病氣」だったのかもしれない。

長男との関係が変わったのは、次男ができてからである。幸い次男は体質は似ているが元気だった。気質も長男とは正反対で、かんの強い、うるさい子だった。

たまたまそういう年齢に来ていたのかもしれないが、次男ができてから長男も変わった。親の気を引こうとするのか、わるさなどするようになった。普通の子どもらしくなったと感じ、少しほっとしたものである。二年保育で幼稚園に行くことになり、不安はあったが、休み休み通ううちに友だちもできた。

次男については私はのんきに考えていた。いくら何でも長男のようなことはあるまいと思っていた。次男は長男とは違い自分からこちらに

積極的にかかわりを持ってきた。私にも接触を求めてきた。母親がいないと激しく泣いたが、長男のそれとは質的に違うような気がした。不安で泣くのではなく、怒って泣くような感じだった。

しかし長男が自家中毒で入院したとき、妻が長男に付き添っていたため、次男は激しく泣いて泣きやまなかった。私は赤ん坊の次男をかかえて病院に向かいながら、途中で次男を捨ててしまおうかとさえ思った。阪神大震災の直後のことで、世の中が騒然とする中、家族四人ともインフルエンザにかかり、長男は自家中毒を併発し、悲惨な状況だったのである。結局、私と妻双方の母親に実家から出てきてもらい、交替で長男に付き添い、妻は次男の面倒を見、私は仕事に出ることができた。家族とはありがたいものだと思った。

長男はこの後（幼稚園に入る直前、ちょうど地下鉄サリン事件が起きたとき）も入院し、私はこの子はとても普通に生きていけないのではないかと悲観したが、実際はそれほど深刻ではなく、なんとか幼稚園に通うようになった。

私はその後何度か神戸を訪れた。復興の様子を見たかったからである。全然関係ないのだが、なぜか神戸の復興と長男の成長がつながっているような気がしたのだった。あれだけの大災害に見舞われても人々は強く生きていた。そのことが長男のことを心配する私を元気づけてくれたからかもしれない。

私は長男が三歳になるまで一緒に遊ぶということがなかった。一緒に遊ぶようになったのは三歳を過ぎてからだと思う。遊ぶといってもゲームをするのだが。

子どもが生まれる前から私はゲームが好き

だった。長男が生まれてからも暇があればゲームをしていた。そのためかどうか、長男も自然にゲームに興味を持ち、私がするのをそばで見ている。そのうち自分で動かすようになり、今では立派なゲーマーで、友だちからも一目置かれている。

よくないことと思いつつ、これまでの成育歴を考えれば仕方ないのかもしれないとも思い、子どもと一緒にゲームを楽しんでいる。妻もそうしている。身体が弱いという意識があるため



か、やはり過保護になっているのかもしれない。子どもが求めるものは与え、好きなことをさせている。そのためかどうか、長男は生活面ではだらしがない。おもらしをする。着替えができない。片づけや整理整頓もだめ。はなはだ心許ない。親としては悩みは尽きないに違いない。

このように長男に対しては今日に至るまで父親らしいことをした覚えがない。私自身、幼い頃父親と遊んだ記憶がない。父は船乗りで、しかも外国航路だった。日本には年に一度ちょっとだけ帰ってきて、それも船にいて家には帰ってこなかった。母は幼い私を連れて、横浜や兵庫県の相生、山口県の岩国などの港へ会いに行ったものである。船室で騒いでよくしかられたことだけは覚えている。

しかし父との仲がずっと疎遠だったというわ

けではない。子どもの頃はともかく、大学生になってから父とよく遊ぶようになった（大人の遊びだが、変な遊びではない）。子どもの頃の父は頭の中の存在だった。実際はそうではなかったと思うが、「かっこいい」父を勝手に想像していた。父と遊ぶようになってからは「かわいい」父だと思った。一緒に遊んでみて、陽気な子どものような父だということがわかったのである。

長男は初めての子で、私としても戸惑いがあった。おまけに病気がことがあってどうしていいかわけがわからなくなってしまったように



思う。それに比べて、次男の方は結構うまく
いっているように思う。前にも述べたが、幸い
次男はあまり病気をせず、私に対して積極的に
かかわってきた。おとなしい長男に比べ、気性

の激しい子である。私としては長男のことがあ
るだけに、次男の激しさはむしろ頼もしい。妻
にいわせれば「育てにくい子」で、確かによく
泣き、手のかかる子である。しかしそれが「子
どもらしい」感じがする。出来の悪い子ほどか
わいいというが、それなのかもしれない。

性格は対照的な兄弟だが、している遊びはよ
く似ている。次男は今ミニカーを並べるのに
凝っているが、長男がやはり二歳頃同じような
ことをしていた。そして次男は今ゲームに目覚
めつつある。自分でスイッチを入れて、画面を
食い入るように見ている。長男がするのをよく
見ているから、感化されるのも当然であるが、

子どもが子どもに与える影響にははかりしれな
いものがある。もちろんゲームだけではない。
何でも上の子の真似をする。生活面のだらしな
さまで似てしまわないか心配である。

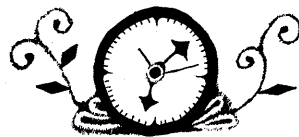
結局、私は父親として特に長男に対しては
「子育て」らしいことをしてこなかったような
気がする。結果的には妻にすべて押しつけた形
である。批判されても仕方がないと思う。しか
し子育てに参加できない父親の寂しさをわかっ
てほしいという思いもある。勝手だといわれれ
ばそれまでだが。

(お茶の水女子大学)

私の中学生時代

戦時中の三年間(1)

湯沢 雍彦



変わった入学試験

のんびり過ぎた小学生時代から一転して、私の中学時代は、すべてのものが戦争の影と色濃く結びつき、重苦しくてやりきれない情景の中にあった。昭和十八(一九四三)年から二十年までの太平洋戦争

末期が私の旧制中学前半の時期で、年齢的にも今の(新制)中学三年間に相当するので、この時期のことを少し振り返ってみることにしよう。

昭和十八年度は、入学試験からして変わっていた。どの程度一般的なものだったかは今もって不明だが、私が受けた東京府立第六中学校(以下「六中」



と略称、現在の東京都立新宿高等学校)は、その前から筆記試験を全廃し、内申書を参考にしながら、面接と体力検定で可否をきめていた。ただし、

面接といっても人物をみるといったものではなく、A室では国語の読み方と解釈、B室では算数、C室では生物標本の名前を言わせるといったふうに、学科別に六室も回らなくてはならず、緊張した姿勢で即答を迫られるのであるから大変だった。体力は、

短距離走のほか鉄棒の懸垂があった。懸垂は三回以内では落第だという噂が流れていたので、私は気を張って五回はこなし、「できるだけ頑張りを示さなくては駄目だぞ」と小学校の先生に言われていたので、身体が上らなくなった後もいつまでも鉄棒にしがみついていた。呆れた試験官に「いいか

らもう降りろ」と言われたのを今でもよく憶えている。

東京ではその数年前から「学区制」という制度が始まり、私が住んでいた渋谷区は、四谷・淀橋・中野・杉並などの区とともに一つの学区になっていた、たとえば日比谷にある天下の名門・府立一中などは受験できなかった。もっともこの枠は公立校だけのもので、私立校はどこを受けても良かったのだが、当時の私立は人気がなく、公立を落ちた者だけが通う所だった。うちの学区の男子校では府立の四中と六中とが抜きん出て評判が高く、自信ある者がここを目指した。私は先生の指示と、歩いて通えるという理由から六中を選び、何とか合格できたのだ。

訓練の毎日

入ってみてから分かったことだが、当時の六中は

皇国主義と軍国調が非常に強い所だった。一般市民に知らされていないことだったが、前年六月のミッドウェー海戦での敗北以来、日本陸海軍の衰退は始まっており、中学生への軍事訓練はきびしさを増していたから全国的な傾向だったろうが、六中ほどことさらそれを鼓吹し、中退して海軍兵学校や陸軍幼年学校へ進む者がいかに多いかを自慢しているところがあった。

門から入るとすぐ左手に天皇の御製の額がかかり、軍隊式の拳手の礼をして校内に入る。それにふさわしくなるようにと、入学するとすぐにゲートルが配られた。ゲートルというのはカーキ色の布脚絆のようなものだが、元来ズボンのスソを脚に密着させるために巻きつけるものだ。ところが、合格しても従来製の制服を買うことができなかった。町中探しても、もう長ズボンなど売っている店はないのである。兄やイトコを先輩にもつものは、そのお古を

貰って格好をつけていたが、私のように長男で適当なイトコもない者は小学校の半ズボン姿のまま登校するほかない。素足の上に巻いたゲートルは、どんなに上手にしてもたるんですり落ちてきた。するとたちまち教官の怒声がとび、ふるえながら何度も巻直しをするのだった。思えば狂気の時代だった。

毎朝の朝礼で黙とうする際の姿勢も、毅然とした態度が要求された。少しでも動こうものならたちまち前へ呼び出され、理由が説明できない者には往復ビンタが飛んだ。ずっとのち私は、平成の初めにある女子高校の校長を兼任したことがあるが、朝礼の際の集まり方の悪さ、姿勢の悪さ、私語の多さには一驚した。自分が生徒だった昔を想うと、とても同一民族とは思えないほどひどかったからである。一年先輩の作家・加賀乙彦（本名・小木貞孝）氏は、『帰らざる夏』の中で、次のように描写してい

る。

「中学校の隣が新宿御苑で朝礼の時宮城遙拝に続いて御苑に最敬礼をする習わしであった。正面、国旗掲揚塔の隣に鐘楼があり、『興国の鐘』と称する鐘が吊ってあった。これは軍艦三笠の時鐘をもらい受けたので特別な時、紀元節とか天長節とかいう祝日に鳴らしたけれども、ふだんは『副鐘』という模造の鐘を鳴らした。鐘の鳴っている間、全校生徒は手を前に組み足を開き瞑目して黙禱するのであった」。

数か月たってようやく学校から支給されたスフのよれよれの制服は、カーキ色で従来の紺サージよりはよほど見劣りがした。これは前からの伝統のようだったが、ズボンの横側にポケットの部分が無かった。寒い時でもポケットに手を入れさせないため

で、しかも手袋の着用も禁じられていた。寒稽古と称して始業前の剣道に集まる時は、両手をこすりながら登校するほかなかった。

きびしいスパルタ訓練の空気は教室の中にもみなぎり、宿題を忘れてくるなどということは考えられもしなかった（即退学がほのめかされる）。音楽の時間でさえ英語の授業の延長の感があり、年若いのんびりした先生が受け持つ図画と工作の時間だけが、わずかな息抜きになった。

夏になっても次から次へと、付属農園の草取り、多摩川原の護岸工事、初級グライダーの訓練などが続いた。

書棚の片隅から出てきた当時の日誌には、農場作業のようすが細かく書かれている。

「十六日、晴、烏山農場で施肥。

作業……二人一組トナツテ溝ソバノ肥料溜カラ

池ノソバノ畑ニ樋ヲカツキデ持つて行き、畑ニ十分肥料ヲカケル。遠イ所カラダンダン近クノ所ヲヤル、道ニ注意シテ行キ帰りガカチ合ハナイ様ニスル。

感想……施肥ハ本当ニ疲レル。家ニ帰ッテ肩ガ痛カッタ。オ百姓サンノ本当ノ苦勞ガ分ル様ナ氣ガシタ。

觀察……小松菜トあぶら菜トガ同ジ種デアルコトヲ初メテ知ツタ。全部食ベラレル。花ハ黄色デ種子カラハなたね油ヲ採ル。葉ハ基ノ部分ガイハユル十字架形デアル。芯ヲ囲ンデイテ互生シ、上部ト下部トノ形ハ異ナッテキル。

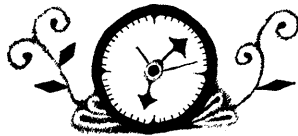
体育の時間は、神宮外苑を一周してくるショートマラソンが多かった。学校に戻ると到着順に並ぶのだが、最終者が帰着すると番号をかけて半分に分

れ、校庭の左右端に立ち、

後半の者は前半の者を背負って校庭を運ばなければならなかった。いつも遅くて小柄な私には、これは奴隷状態の苦しみであった。

夜間の行軍も何回かあり、甲州街道をひたすら西へ歩き、一時間余り行った所で引返すのである。何しろ朝からの授業のあとなので、単純な歩行はしばしば眠気におそわれた。歩きながらいつのまにか眠ってしまうのだが、両脇の友やうしろの友に押されながら歩いている。人間は眠りながらも歩けるものだ、と我ながら感心した。

その訓練の成果をためすつもりか、七月終りには那須高原で五日間におよぶ本物の兵舎を使う廠営が





実施された。テントでの甘いキャンプなどではない。十二歳にして兵隊に近い訓練に連れ出されたのである。小さな肩に本物の重い小銃がくいこみ、雨を何時間も行軍した苦しみは、今でも時々夢に見るくらいである。

おまけに、不潔な兵舎での食事は、コーリヤンにモロコシの雑炊といったひどいもので、半分近い生徒が下痢を起して倒れた。しかし、医者も救急車もなく、家からの迎えなど望めるものではなかったから、皆よろめくようにして自力で帰宅したのだった。

その後は半月近くの夏休みが与えられたが、私はその貴重な休暇期間のほとんどを自宅で寝て過ごさねばならなかった。私は小学校では二日休んだだけの精勤賞であ

り、職場に出ても病欠したことはほとんどない。こんなにも長く病床に臥したことは前にも後にもないという大病だった。卒業後二十年以上たったときのクラス会で、同行していた先生の一人が、「大きな声では言えないが、あれは本物の赤痢だったんだよ。よく皆が死ななかったものだ」と語って我々を驚かした。

空襲の中で

この秋十月二十一日の雨の中、明治神宮外苑競技場で、大学生・高専生の学徒出陣壮行会が行われた。ところがこの有名な史実を私は戦後まで知らなかった。中学一年生はラジオも聞かず新聞もよく見てなかったのだろう。しかし、翌十九年の春には、我々も同じ競技場のスタンドに立って、「御民われ、生けるしるしあり天地（アメツチ）の、栄ゆるときに会えらく思えば」と合唱したことははっきり

覚えている。万葉人の心は当時の我々にびったりだ
と思ったからこそ忘れないのであろう。

昭和二十年五月二十五日、新宿、渋谷、豊島など
の山の手一帯が大空襲を受けた。防空壕にひそんで
いた私が時々顔を出してみると、大雨の時のような
音が聞こえ、閃光を引いた焼夷弾が幾つも斜めに
降ってきた。だがそれは山の手線の土手の内側に落
ちていくのであった。警報解除のあと顔を出してみ
ると、土手の外側にあった我家は焼け残っていた。
夜明けになるとそほの大通りを焼け出された人の波
が明治神宮の方へ向っていた。その人々は口々に
「焼けて良かったよ」「これでサッパリしたな」と
言い合いながら歩いているのである。「何てこと
だ」と奇妙な思いで聞いたことも忘れられない。焼
け出された親類が三組もころがりこんできて、五人
暮らしの我家は十五人もの大世帯にふくれ上った。
これで山の手線も中央線も動かなくなったので、

二、三日は代々木―五反田間の線路を歩いて動員さ
れていた工場へ通った。復旧して電車に乗った後
も、「あつ、まだあった」「今日も残っている」と車
内の窓から見える自宅の姿を毎日確かめたものであ
る。

五回に及んだ大空襲で東京市の大半が焼野原と
なったように思えたが（後の計算によると五十一
パーセントだったそうだが）、私についていえば、
住宅も学校も工場も焼かれずにすんだ。だから疎開
しないですんだのである。何かの運がついていたと
しかいいようがない。

（郡山女子大学）

ある日の育児日記から

(79)

佐藤 和代



る、というわけにはいきません。たまに二人で始

て、ルールの何たるかはよくわかってないのし

じになってきました。
とはいえ、まだまだ圭と有だけでゲームに興じ

なきやいけないだよ！
まあ、ゲームのルールがわかるようになったっ

前に参加できる。これでもう圭と二人でゲームし

てい圭が怒りまくっているのです。「有ったら、

て、ゲームのとき使えいものになるのが一番。

まってしまうので。
あーあ、またやってる

よう。相手が大人なら笑っ
てしまう稚拙なずるでも、
圭は本気でいきりたっ
まうし……。二人で仲良く
ゲームができるって、簡単
に見えて、高度な(?)成長
を必要とするのですね。



子どもが作らな。どうして困ったの。



幼児期の水遊びと

大人になってからと

津守 真

三歳のG夫は、私の頭の上に砂をひとつまみのせて、ポーシと言った。私が頭を振って砂を落とすとケラケラ笑った。

自分で遊ぶようになったG夫は、水と砂を好んだ。水を何度も汲みに行き、砂場に流す。水と砂がぐにやぐにやになったところ、手に手をいれ、握ったり放したりかきまわしたりするのが楽しんだ。どちらかと言うと観念的に自分の世界に閉じこもりがちなこの子は、自分の手で直接に物質にふれる体験を欲しているように思われた。それか



ら、手に攪んだ砂を砂場の外に向かって投げた。それは投げるといふよりも手に持ったものを敢えて手放すこつを練習しているように見えた。憑かれたように、G夫は毎日それをつづけた。『保育の体験と思索』に記したように、その遊びをしている間に、この子が悩まされていた便秘がなくなった。

同じ時に家庭指導グループに来ていたN男も水を好んだ。

ある日、泣き声を出して私にくっついた。私が背中におぶって歩くと、柱にしがみついて、私が歩く方向に行こうとしなかった。ふと私の背中からおりて、引き出しから絵の具をだし、黒色の絵の具を筆につけて紙に人の顔を描いた。それから絵本の表紙の人形の絵を黒色で塗りつぶした。いま描いたのは「人」なのだよと強調しているように思えた。それからヤカンに黒色の水をつくり、コップにあけた。コップとヤカンはいつもきちんと対にして置かれた。水が床にこぼれて床が水びたしになるので、私はそれを拭くのに忙しかった。N男は毎回この遊びを繰り返した。帰りに母親が入って来て、黒い水があちこちにこぼれているのを見ると、「あ、N男かしら、よく遊んだのね」と言った。私は母親のことばに感心した。N男は家でも同じような遊びをしていることは明らかだった。

しばらく後、N男は、家で「人の形」を紙に描き（母親はそれを「こけし」と呼ん



だ、それを黒い水につけ、近所の川に流しにいったことを母親は話してくれた。近所の人も、この子は口をきかないから何も分からないのかと思っていたら、「けし」を川に流しに行くなんてすごいと、この子に対する評価が高くなったとのことであった。私共はときどきこういう不思議な遊びに出会う。それが何なのか、そのときに分かり難いが、この子の心にはいろいろの思いがあったことは確かである。そして、母親もこのことを心にとめ、肯定して私に話してくれたのだった。

これらのことからちょうど二十年たった。

地域の学校に行き、立派な青年になったG夫は、ホテルで料理人の修行中である。N男も地域の学校を卒業してクリーニング店に勤め、主人に気に入られて、毎日愉快に働いているという。多くのことがこの間に起こっているから、幼児期と大人になってからとを因果論で結ぶことは放棄せねばならない。しかし、水と砂に手を入れてこねるのを好んでいたG夫が働き場として料理を選び、人を描いて黒い水につけ川に流しに行ったN男が、汚れを洗い落とすクリーニング店で働いているのを考え合わせるのと、成る程とうなづける。そしていまは大人になったこの子たちへの親しみが一層増してくる。もしも大人になったこの子たちと再び生活をともしする機会があれば（そんなことはあり得ないことだが）、幼児期に付き合った者は、全人的関心と洞察を



もってその子と前進的に付き合えるに違いない。

ひるがえって、幼児期のことをもう一度考えると、あのときに私は水で遊ぶことを肯定的にみて、それを十分にやらせてあげたのがよかったのだと思う。それがなかったならば、二十年後の生活は違っていただろう。当時私は水をそんなにやらせることに自分自身ためらいがあったし、実際そういう批判を受けていた。それに応えるのは、週に一日だけではなく、毎日子どもとかかわる生活をしたと思うようになっていた。

前回に記したH子と、右に記したG夫、N男と三人、同じ時期に家庭指導グループに来ていた。私がこの子たちの水と取り組んで保育をしていた最中、何回も事務局から呼ばれ、愛育養護学校の将来について相談を受けた。私はその緊張感のなかで水遊びとつきあっていた。私が専任校長になる数年前である。

あそびはらっぱものごたたり

すとうあさえ

園庭のけやきが作ってくれる木陰に入る暇もなく、お日様のもと、水や砂や土と遊んだ夏。子どもたちは、元気です。では、あそびはらっぱものがたりのはじまり、はじまり。

おさんぽ・おさんぽ

(駒場野公園へ)

雨上がりの落ち着いた日さしの中、きょう、初

めて子どもたちとお散歩に行くことにした。行き先は、筑波大学農学部跡地にできた自然公園、駒場野公園。なるべく車の通らない路地を選んで歩くことにする。三人お休みなので、子どもたち二十人、大人三人。総勢二十三人。

「駒場野公園へ、しゅっぱあーっ」

「オーッ」。

淡路通りを渡り、細い道に入る。

年長さん年中さんが二人ずつ手をつないで歩く。ピンクとオレンジの帽子がびよこびよこはねて、小さなお花畑が移動しているみたい。

幼稚園から駒場野公園まで子どもの足で十分位。ところが、私たちの場合はその三倍強の時間がかった。

「あっ、栗の花、発見」

先頭をいく千春さんの声がひびく。すると列は乱れ、だだっど発見現場に向かい、駐車場に落ちている栗の花を拾う。

一段落してまた歩き出す。また、団地の生け垣の前で千春さんの声。

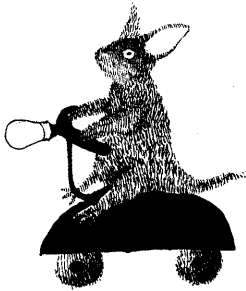
「うすばかげろうの卵、発見」

細いピアノ線が、びっ、びっ、びつとたんぼほの綿毛のように伸びていて、その先に小さな粒のような卵がついている。私も初めてみたので、子どもたちと一緒に「へえええ」。

こんなふうには、街の中にある小さな自然を鑑賞しながら、駒場野公園に到着。

公園に足を踏み入れたとたん、みんなわあっと走り出した。中央の広場へ行くと、ベンチに腰かけてエレキギターの練習をしているおにいさん、発見。

子どもたちはまわりをぐるりととり囲んで、じいーっと見ている。男の子がしみじみ、「うまいねえ」とつぶやく。若者は果敢にもこやかな笑



顔で練習を続けていた。一方、近くの高校生がクラス写真の撮影中。四、五人の子どもたちが、カメラマンとならんで撮影を見学している。横一列に手をつないで見ている子どもたちと、照れている高校生たちの様子がおかしくて、私は一人ふき出してしまった。

駒場野公園は、雑木林に自由に入れないし、自然公園にしては整備されすぎているように思う。管理上仕方ないのかもしれないが……。ま、それでもやまぐわの実をひろったり、てんとう虫のさなぎと卵を発見したり、子どもたちは小さな自然に出会うことができた。いちごのミニミニミニサイズ形のとんとう虫のさなぎ。そのそばに、黄色いごくごく小さな粒の卵。見過ごしてしまいそうな小さい命。でも、私たちが見過ごしているから、命がつかなくていかれるのかもしれない。

小さな自然発見&人間ウォッチングを楽しんだ

初めてのおさんぼ・さんぼ。幼稚園到着の時間をかなりオーバーして、幕。

飛ばないじゅうたん

春、幼稚園で羊のサリーちゃんの毛刈りをやった。その毛をきれいに洗って、モンゴル式じゅうたんを作ろう!ということになった。暑い日だったので、水を使うのもちょうどいいと思い。いよいよ決行。

サリーちゃんの薄汚れた、臭い毛を園庭に連発。子どもたち、予想通り、「くさくさあーい」を連発。これは、一種の連鎖現象で、一人が「くさい」といったら、次の子はその子よりもっと大声で「くさい」を言わないといけないような感覚になるらしい。

とにかく、「くさい」コールがおさまるのを待って（しかし本当に強烈な臭い）大きなたらい

に水をはり、毛をつけて洗い始める。これは子どもたちが大好きな作業なので、張り切って押し洗いをしている。水を何度も変えて、何度も洗う。ぐっちゅ、ぐっちゅ、ぐっちゅ……。

「きれいになった」「白くなったね」と言い合いながら、ぐっちゅ、ぐっちゅ、ぐっちゅ……。

臭いもかなりなくなり、見違えるようにきれいになった毛を、ゴザの上に伸ばす。

水洗いで赤くなった小さな手で、固まった毛をほぐしながらひろげていく。次にお湯を毛にまんべんなくかけ、石鹼で表面をこする。泡立ったところを、子どもたちが、手でなげる。手のひらいっぱい、毛の感触とすべすべ感をキャッチしながら、みんな、平べったくなくてこすっている。

ひとしきりなせた後、ゴザでふたをして、その上に裸足になって乗り、ミュージック、スター

ト！リズムにあわせて足で毛を踏む。この時、春に「裸足になれないの」と私にいつてきた女の子が、靴と靴下を脱ぎ捨てて、ゴザの上にびよんと飛び乗ったのを目撃。満面笑み。とても楽しそうに踊っている。理屈ではなく、サリーちゃんの毛を手で触り、臭いを嗅ぐという遊びの中で体験した感覚的な何かが、彼女の裸足になりたいという衝動を押し出したように思う。この時から、この女の子はすっかり裸足大好き少女になった。

さて、モンゴル式じゅうたん。子どもたちの足で踏まれたあと、丸太を芯にしてくるくる巻き、ひもでぎゅっとしばり、最終段階は、ひもをもつて、園庭をズルズル引きずりまわす、という具合。モンゴルと違うのは、引きずるのが馬ではなく子どもであることと、草原ではなく土の上、ということ。

この違いはあとの結果に大きく響くこととなっ

た。つまり、余りに何度も引きずりまわし、おまけにゴザの間から泥が入り、出来上がりは……洗う前のサリーちゃんの毛に逆戻り。子どもたちは、こんなものかなと思ったのか、プロセスを棄しんで満足なのか、冷静に事実を受け止めた様子。落胆したのは千春さんと私。泥まみれの毛をタライに戻しながら「また挑戦しよう」と誓いあった。

シャボン玉とんだ

風も優しいし、お日様も元気。こんな日はシャボン玉日和といってもいい。園庭のけやきの木陰に机を出して、さっそく薬の調合よろしく、子どもたちの見守る中、シャボン玉液を製造する。飲む危険もあるので安心材料で。生協の液体せっけんと炭酸飲料を五十ミリリットルずつ混ぜ合わせ、使用済みの紅茶ティーバッグを入れて少し色

を出し、よく混ぜるだけ。炭酸飲料も飲み物だとわかると思わず飲んでしまう子もいるかもしれないと思い、それとわからないように入れ物に移しかえた。万全に整えて、しゃぼん玉液を作り、子どもたちに小さなカップに入れて手渡した。手渡しながらも「これは、飲んじゃだめよ」と一言付け加え……たにもかかわらず！苦虫をつぶしたような顔をした男の子一人。

「飲んだ？」

「うん」

のん気に、シャボン玉液をストローでかきまわしている彼を急がせて、うがいに走る。

他の子どもたちは次々にシャボン玉を飛ばし始めた。すべり台の上やジャングルジムの上、お気に入りの木の枝の上から、大きい小さいの、ふわふわふわふわ、風に運ばれて飛んで行く。シャボン玉は、幼稚園が面している淡島通りまで飛ん

でいく。信号待ちしたバスや車から、しゃぼん玉を飛ばす子どもたちに笑いかけてくれる人たちもいたりして、なんか楽しい気分。

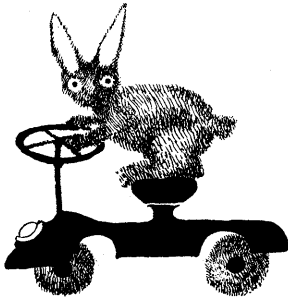
そのうち、しゃぼん玉を飛ばすのにあきた子どもたちは、ストローでカップに息をふうとほき、ぶくぶくぶくと山盛りの泡を作り、それをフッと吹き飛ばす遊びを始めた。小さな泡の一つ一つがつつやと美しい。すると、三人の男の子が砂場横の水道の排水口のまわりにかがんで何かを始めた。そっと近寄ってみると、排水口にふたをして、しゃぼん玉液を入れ、三人はかがめるだけがかがんで、ストローでぶくぶくやっている。泡がみるみるうちにふえて、山のようにふくらんでくる。時々、オウ、オウと低い歓声があがる。しゃぼん玉液を補給しながら、ぶくぶくぶくぶくぶく。ただ、それだけ。でも、面白そうだった。

シンプルなしゃぼん玉遊びだからこそ、遊びつ

づけられる安心感みたいなものがあるのかな。しゃぼん玉と戯れた一日だった。

水でっぼう、シュツ

暑い！こんな日は、水あそび、ということ。竹の水でっぼうを作ることにする。のこぎりで竹を切る。キリで水が出る穴をあける。持ち棒に布を巻く。子どもたちが自分で作ることを基本に、



この三つの作業をそれぞれ三人の大人が受け持つてスタートした。

一人の男の子はのこぎりで竹を切るのにはほとんどの時間を費やしたといつてもいいくらい、頑張った。

ぎ、ぎーこ、ぎ、ぎ、ぎーこ……汗をばたばた流しながら竹を切り続けている。すでに完成した水でっぼうで、的は大きいほうがいいとばかりに、私のおしりめがけてシュッシュッかけてくる子がいれば、すっかりびしょぬれになっている子もいる。また、水でっぼうは一段落して、前回遊んだように、シャボン玉液を作り、排水口にかがんで、泡ぶくぶくを始める男の子たちもいる。竹をトントン鳴らして即席太鼓を楽しむ女の子たちもいる。それぞれに遊びが展開する中、その男の子は一人、ぎ、ぎーこ、ぎ、ぎーこと竹を切っている。そして、ついにできた！

「ね、ね、ぼく、はじめて一人でやった」と静かな笑顔で言う。「はじめて一人でやった」——いい言葉だなあと思う。この子は自分一人でやり遂げた達成感に感動している。そして、私は感動している彼に感動していた。

水でっぼうの水が飛び交う中、アオスジアゲハが一匹ひらひら……。初夏のあそびはらっぱワンシーン。

*

あそびはらっぱも夏休み。秋には、また、子どもたちのすてきな育ちを見せてもらえることを楽しみに。

時は流れて、夏から秋へ……。

(幼年童話作家)

震災後の子どもたち(17)

ゆさざらわねても地に足つけて

穴井 重行

寿枝のこと

長女寿枝は十八歳になります。下に妹中三、弟中一の三人兄弟です。この春、神戸市立青陽東養護学校を卒業しました。生後三か月でダウン症と宣告され、妻は病院から帰るなり灯もつけない

で、部屋の片すみで寿枝を抱き放心したようにじっとしていました。

涙が頬をつたいどうすることもできなかつた。「これからどうすればいい」「なんでやなんや、自分たちだけが悲しい、苦しい目に遭うんや！」頭の中でそんな言葉がグルグルまわるだけ

でした。そんな思いをしたことがつい昨日の事のようにです。障害児を持つと、自分を責め妻を責め、その先にあるものはやもすると孤立、そして「内」にこもってしまう場合がある。ひとつまちがえば私たち家族もそうなったかもしれないせん。幸いこの十八年間多くのすばらしい人々に巡り会わせていただき、ここまでくる事が出来たのです。あの震災のなかでも私たち家族は多くの心ある人たちに助けられて今日があるのです。

大震災のあと

一九九五年一月十七日午前五時四十六分、震災の発生、神戸市民約百五十万人の人々に震災はひにくにも平等にゆさぶりを掛けたのです。亡くなられた多くの方々の冥福を祈ります。自然の力の大きさに比べ人間の無力さ。そしてそこから始まったそれぞれの人生。

私たちへ自然は何を戒めようとしているのか、そこまで考えさせられました。住んでいるマンションは七階でヨコゆれタテゆれ凄まじいゆれの中で一瞬これで終りだと思えました。ゆれが一時おさまり灯りをさがし目にしたものは全てガレキとなった家具でした。次女と長男は子ども部屋の二段ベッドで寝ていて助かり、私と妻と寿枝は狭い部屋で助かったのです。タンスが重なりささえ合ったのです。

大人もおびえます。子どももおびえます。ましてや障害児の寿枝にとってはすさまじい体験でした。「こわいこわい、こわいこわい」の連発でした。その声はほとんど絶叫でした。幼い頃より暗闇を非常に恐がる子でしたので心中ははかりしれない恐怖だったと思います。彼女は母親が抱き締め声を掛けるなか失禁をしていました。また余震です。落ちた食器が大きくハネあがるのです。大



声で次女と長男に「ベッドのふちを持ちじっとしている動くなヨ」と言い明るくなるのを待つことにしました。すると寿枝が突然妹の名を呼びだしたのです。「くみちゃんくみちゃん」何度も何度も。「くみこの所へ行きたいんか？」と聞くのと、行くと言います。ベッドの方が安全と思ひ寿枝を子ども部屋へ移動させました。するととたんに落着きを取りもどしともしっかりした声で、「お父さん、もういいよ。お父さんガンバレ！」と言ったのです。これには私もびっくりしました。兄弟の力でしょうか。夜が明け、外の様子に戦慄を覚えました。安全な場所へ行こうと車を出し小学校へ行きました。校舎の横の道路で車を止め二日間過しました。

この時の食料はパン五枚、タマゴひとパック、肉ひとパック、バターとトウフ一丁、牛乳ひとパック、そしてなんとポリタンク二個に水がたっ

ぷりと入れてあったのでした。水は知人にも分けました。子どもたちに食料を見せ、これで三日間もたす事を話しました。三日すれば心配なく食料はくると思っていました。一日二食、十時頃と五時頃と決め、パンは二人で一枚とし水分は多く取らせた。くいしんぼうの寿枝が食がとても細くなっていった。夜は非常に寒く月が異様なくらい美しかった。寝れなかった。

二日目、バイクで知人の家をまわり安否を確認に行ったがほとんどが避難して会えなかった。重度障害で一人暮らしの後藤君が気になり彼の自宅へ行った。アパートは傾き戸は開いたままだった。声をかけても返事がない。彼はいなかった。彼はボランティアにいつも来ている女の子にベッドの下から担ぎ出されたと後に聞き安心をした。道一本反対側は火の海でした。悲しくてくやくして涙がとまらなかった。どうしようもなく車にも

どり夜を迎えた。

仲間との助け合い

三日目、学童保育や出合の里を通して私的にもお世話になっている、石本さんが私たちをさがしまわってくれていたのです。「こんな所で寿枝や子どもたちを置いたらあかん！

私の家へおいでヨ」とおこるようになってもらい、一家でお世話になったのです。その後、これも学童保育を通しての友人である、森末家族や安藤家族と石本さんの友人の方とで石本宅にて合同生活が始まりました。昼間それぞれに活動し、夕方皆で集り大勢で食事をする。この時期に不謹慎かもしれないがそれは実に賑やかな食事でした。これが私にとってこの時期一番の活動源となりま



した。三人の子どもたちもより安全な北区の親戚へ預かってもらいました。

このお家は私の遠い遠い親戚で、寿枝が幼い頃身内にも相談が出来ない時やつらく苦しい時、私たち一家をばげましてくれてあたたかく見まもってくれた家族でした。それがあったからこそ、異常な事態の中で心よく迎えていただき寿枝も素直にお世話になる事が出来たのです。私たち家族が

二週間そこで自宅マンションで、不自由ながらも生活が出来たのも石本さんや北区の矢野家の人たち、また多くの親友のお陰です。この様にして私たちはすこしずつ生活を取りもどしていったのです。

学校再開と子どもたちの再会

学校の再開のニュースは寿枝にとってまちどおしい事でした。しかし再開するまでの校長先生をはじめ職員の方の努力は大変だったと思います。最高時、養護学校への避難者は千五百人の方々がいました。二月二十二日、学校再開。この時避難の方々七百人。障害児たちにはどのように映ったのでしょうか。初日、子どもたちは肩をたたく合って再会を喜んだと聞きます。そして、震災後の子どもたちの様子がそれぞれに分かってきたのです。

震災があってもなくても障害児の子どもたちにとって学校は大切な心のよりどころなのです。友がいて先生がいて自分がいる、それを確かめる場所なのです。震災後交通機関がマヒし学校がストップしている事も理解出来ません。学校へ行くと言ってあばれます。親はやむなく駅までつれて行き何時間も線路に立ちこない電車を待ちます。「ほらこないだろ……」と教えたと聞きました。

何日も何日も。また、今回一度は避難所に行ったものの、ほとんどの人が自宅あるいは知人の家または壊れた自宅へ帰ったと言います。避難所では生活パターンが急に変化し、その為、奇声、偏食、パニックと障害児本人にはどうしようもない状態になる。周囲の人たちからは共同生活をたてまえに「障害者である」理解とは別に、親に辛い忠告が多くきたりしたのです。私は避難所にも老人や病氣の人たち、さらに障害児(者)にも配慮

した、避難所があつて当然と切に望みます。

M君とカウンセラー

八年前より私はボランティアで、障害者の人たちが働く場を作ろうと始まった自然食品の店の手伝いをさせてもらっています。私の仕事は勤務終了後、ステーションまで商品を取りに行き、注文をもらった各家庭へ配達をする事です。現在難区を担当しています。その配達にいつもM君をつれて行きます。彼は二十三歳になります。彼は自分の身の回りの事や物事の判断はかなり高度に出来ます。しかし、ボタンの掛けちがい現象と言われるような、ちょっとしたミスから一瞬にしてパニックになり、出口を見失い自分では解決できません。彼独特の「こだわり」の世界へ入ってしまいます。何回も何回も同じ質問をくりかえし他人に確かめるのです。そしてやっと自分が落ち着きを取

りもどすのです。長い長い時間がかかるのです。そんな彼も今回の大震災でパニックになってしまいました。幸い、彼の自宅は被害が少なく軽度でした。しかし心に受けた衝撃は大きかったと思います。

そんな彼に私は配達の途中、「M君ヨー今度の震災で一番しんどかったことはなんやったー」と聞きました。すると彼の口からこんな答えが返ってきたのです。「僕ネー今度の震災で一番しんどかった事は母さんが頭の手術をして入院したことがやっぱり心ぼそかったヨー」。その後思い出した様に、「そうそう、もうひとつあるねん。それはネ、僕がパニックになって相談所へカウンセリングを受けに行つてる時やネン。ホンマあれはしんどかったですヨー」と言います。最初私はバスや電車で行く道のりかと思つたのですが、よくよく話を聞いて見るとそうではなかつたのです。彼

がカウンセラーの方に相談をする。ところがこだわり家の彼としてはいつもの様に何回も何回も同じ質問をくりかえす。カウンセラーも何回もくりかえすもんだから、ついつい分かった分かった、また次においでと帰される。彼はまた相談所へ行く。カウンセラーもついつい前と同じ対応をする。彼も何回も何回も質問をするのです。あまりしつこいのでカウンセラーの人ももう帰らないとここへ来てはいけないヨ！ 皆忙しいだからと言われたようなのです。

このカウンセラーの方の言うとおりなんですが、どっこい実はそうではなかったのです。M君にとってカウンセリングとは何回も行って同じ質問をくりかえすことであり、答えを聞く事ではなかったのです。だから彼はカウンセリングの人にもうこなくていいよと言われるのがとてもこわかったのです。彼いわく、「穴井さんだから（言

うけどネ)、僕ネその人をおこらせないようにカウンセリングを受けたんですヨー。そりゃあもうとてもとても気をつかって言葉も選んで質問をしたんですヨー。それが震災後一番しんどかったですヨー……。いったいどちらがカウンセリングやら。皆さんはどう思われますか？……

(高羽風の子学童保育所運営委員)



「シンデレラ」を 読み替えること

渋谷 真樹

テキストは全くのオリジナルとして生まれるのではなく、過去に蓄積されたテキストに応答して生まれる、と述べたのは、ミハイル・パフチンである。同時に、テキストは、その時代に支配的な言説の影響を受ける。すなわち、テキ

ストは、歴史的・社会的・文化的な声に呼応しながら、固有の位置を編み出していく。

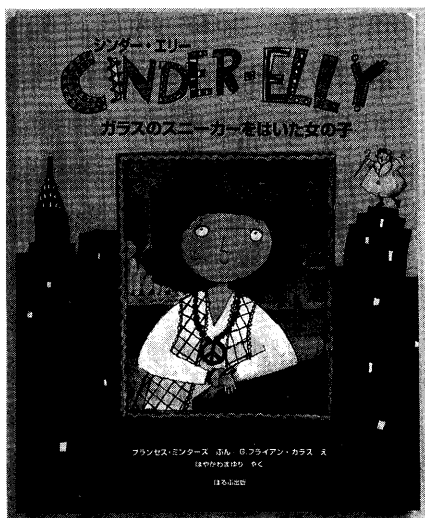
そのことを示す好例が、「シンデレラ」の読み替えの系譜ではないだろうか。女性が自由に伴う責任に向き合えずに、保護し、世話をし

くれる男性を待ち望む現象を、コレット・ダウリングが「シンデレラ・コンプレックス」と名付けたのは、一九八〇年代前半のことである。それ以後、シンデレラは、男女平等化を目指す時代に逆行する女性像の代名詞のように扱われ、このよく普及したおとぎ話を、現代風に書き替えようとする試みが続けられてきた。ここでは、アメリカで生まれ、近年、日本にも紹介された現代版シンデレラ・ストーリーを二つ紹介したい。

まずは、『シンダー・エリー——ガラスのスニーカーをはいた女の子——』である。この絵本の扉には、PCの文字とフェミニストのシンボル・マークが手書きされた紙切れが、べたりと張り付けられている。フェミニストのシンボルは、話の中で、主人公のシンダー・エリーの胸にも輝いている。

PCとは、Politically Correct（政治的な適正さ）の略で、欧米を中心に盛り上がりを見せる、マイノリティ・グループを差別したり、

▲「シンダー・エリー——ガラスのスニーカーをはいた女の子——」フランス・ミンスタース文
G・ブライアン・カラス絵 早川麻百合訳
ほるぷ出版 一九九六年

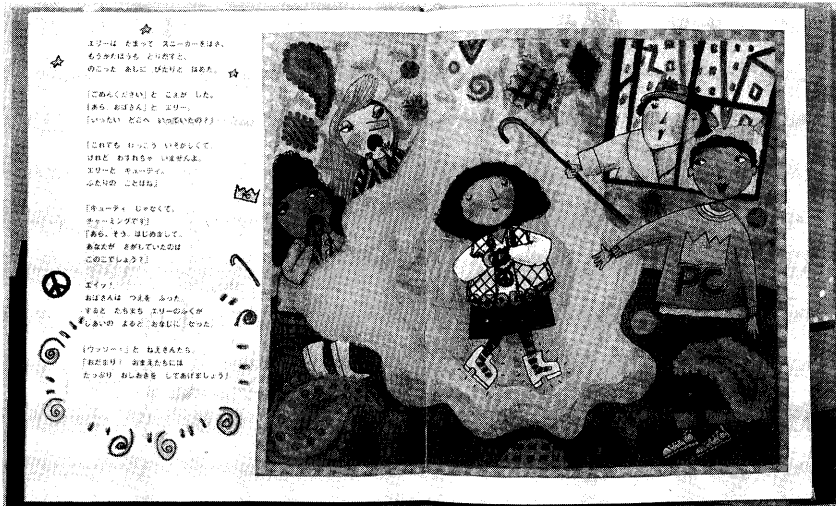


不快感を与えたりする表現を撤廃しようという運動を指す。さらに、PCは、エリーが最終的に結ばれることになるプリンス・チャーミングのイニシャルと一致する。

つまり、この作品は、フェミニストの少女が、政治的に正しい少年に出会い、救済される、現代の社会問題に敏感なシンデレラ・ストーリーというわけである。

この絵本の特徴は、なんとといっても、ことごとく現代のニューヨーク風書き替えられた話の中の小道具にある。たとえば、エリーは、絹のドレスならぬポップなティーン・エイジ・ルックで決めている。エリーが招待されるのは、城の舞踏会ではなくバスケットボールの試合に、ガラスの靴はガラスのスニーカーに、様変わりしている。

また、話のあちこちで「なんてこった!」



▲エイッ! おばあさんはつえをふった。するとたちまちエリーのふくがしあいのよるとおなじになった。

「いったい、どうするつもりだろう？」といった声の外から飛びこんできて、テキストの中に挿入され、あたかも多重放送を聞いているような気分させる。

さらに、画面には、スケッチブックや新聞紙、チケットが無造作に切り張りされ、落書き風のイラストがちりばめられて、キッチュな構成になっている。

こういった意味で、この作品は、非常に現代的な様相のシンデレラ・ストーリーに仕上がっている。けれども、服従に耐えた可憐な女性が、権力ある男性に見初められて幸運を掴む、というストーリーそのものは、不問に付されている。エリーが自由に街に飛び出していけるのは、名付け親の魔力で流行の服を手に入れた時であり、学校一の人気者のバスケットボール選手の愛情を得てようやく、姉達を見返すのであ

る。

このような、男性による女性の救済というストーリー自体を打ち壊し、改作したのが、『政治的に正しいおとぎ話』である。「シンデレラ」は、収められた十三編の昔話のパロディの中の一編である。PCの動きに関心を寄せる大人が読み、賛否両論を闘わせたベスト・セラーであるが、ティーン・エイジャーにも容易に読めるであろう。

この作品の中で、シンデレラは、「男どもが望む美のコンセプトに自分をはめこみたい」女性と捉えられている。「疑うことを知らないカイコから盗んだ絹」や、「働き者で無防備の貝から強奪した真珠」で自分を飾り立てた結果、彼女は、王子達に彼女を所有したいという過った欲情を抱かせることに成功する。

王子とその男友達らは、シンデレラの所有権

をめぐって、「不道徳的男性ホルモン」をむきだしにし、「破壊的マッシュダンス」を練り広げ、ついには全滅してしまふ。

一方で、シンデレラは、十二時を過ぎると、美しいドレスもガラスの靴も失ってしまう。しかし、彼女はむしろ、「非現実的に女性美の基準」からの解放を喜ぶ。それを見ていた女性達も、シンデレラにならって、「体をしめつけているものすべてをぬぎ捨て」、「女性のために着ごちのいい、実用的な服」だけを製造するシンデレ・ウエア・ブランドを設立し、「だれにも依存せず、賢明なマーケティングをして」いつまでも幸せに暮らした、というストーリーである。

この話、まずは、中産階級の男性によって作られ、人々の生活の中で長い間温存され続けてきた家父長制や、女性蔑視・性差別、ヘテロセ

クシャル（異性愛）を排他的に支持する偏見などを、明快に転倒させた、と言っておこうか。

特に、この作品が日本で読まれる場合、まだまだ差別への認識と、それを撤廃しようという意識が低い日本社会の現実への反省がなくてはならない。PCやsexist（性差別論者）といった言葉は、しばしば単なる標語と化し、実体を失ってしまいがちだけれども、そのような言葉を持つことによって差別に敏感になることは、重要な第一歩である。

その一方で、周到に作り上げられた回りくどい言い回し——たとえば、「あの女性こそ、ぼくのプリンセスとして、祖先から受けついで完全な遺伝子をはらむべき女性だ」という、シンデレラに対する王子の「賞賛」など——や、差別への過敏な反応は、容易に諧謔的な言葉の玩弄へと転化しうる。だから、この作品は、古典

的な物語を壊し、現代風に書き替える試みであると同時に、過熱化したアメリカでのPC運動を相対化し、笑いの対象にしてしまう試みとして受け止めることもできる。

▲『政治的に正しいおとぎ話』

ジェームズ・フィン・ガーナー著

デープ・スペクター、田口佐紀子訳

真野流監修 ディー・エイチ・シー 一九九五年



ここに挙げた二作は、共に、読んで閉じられ
てしまう物語ではなく、読者に声を出すことを
要求する作品である。それらは、読者によって
受動的に消費されるものではなく、読者の生活
の中で生きられるのであり、新たなテキストの
生産へと分かちがたく結び付いている。このよ
うな本に触発されて、子ども達が、伝統の名の
下に無批判に受け継がれてきた「おとぎ話」を
打ち砕き、自分達のストーリーを編み出して行
くことを期待したい。個人が自分の経験の中か
ら話をつむぎ出し、言説を多元化していくこと
が、権力の声に対抗していくひとつの手段であ
ると思われるからだ。

(舞々同人)

子ども視線

上坂元絵里

ある朝のこと

一月中旬のある日、三番目にO子が登園して来る。祖父が送って来る。朝は部屋に来る前に、必ずトイレによって来て欲しいと伝えてあるので、祖父は「トイレはないと言いますので、寄ってお

りません」と、申し訳なさそうに言う。O子はまだあいさつをしていない。O子はいつも、登園が早いほうだ。この日もまだ保育室は静かで、私はゆったりとO子と出会えた。

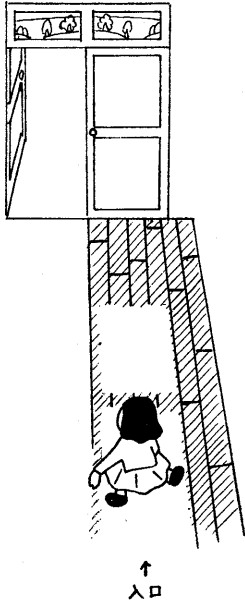
入口からまっすぐに視線を向けたO子は、やや上を見ながら数歩前に進む。朝日が射し込んで、

庭への出入り扉にはめこまれたガラスを通して、床に日だまりを作っている。O子は、その明るい場所の真ん中に行くと、すたとんと腰を落としてぺた々と座り込んだ。言葉はひとつもない。このわずかな時間の出来事は、印象的な映像として私の中に残っている。何か、映画のひとつとこまとも表現したいような、美しさがあつた。

私共の園は、古いレンガ作りの園舎で、保育室は木の床のぬくもりが感じられる。上窓には、組

の名前にちなんだスタンドグラスがはめこまれていて、思いがけず美しい光を見いだすこともある。四季折々、あるいは一日の中でも時間によって、いろいろな風情が感じられる。

O子が座った時に初めて、光を見上げていたのだということがわかった。私の勝手な推測かもしれないが、この時、O子はガラスを通して、木の床に射し込んだ光をきれいだなと思ひ、その暖かさを体で感じたたくて座り込んだのだろうと思っ



た。そして、私は、目で美しさを感じ、体で暖かさを感じている。O子そのものが、とても美しい、愛らしいと感じた。私の中には何ともいえない感動があった。

次々に登園してきた母親たちが、「あの活発なO子ちゃんが珍しいですね。イメージが違っちゃいました」と驚く。私は「O子ちゃんは、とてもよく物を見ていて、こういう雰囲気をもってるお子さんなんですよ」と話した。

O子のこと

O子は三年保育の三歳児、早生れだが、話すときに少し幼児音が残る以外は、すこぶるたくまishi。この組には、いろいろな事に興味を持ち、いろいろな人と積極的にかかわろうとする活発な子どもが多かった。O子はその中でも、欲しい遊具はしっかりと自分の物にする、目新しいことには

しっかりと参加する、というタイプだった。

例えば、三学期に入って、ごっこ遊び用の長いスカートを新しく保育室に出した。その際にも最初の二日間は、一番目を引く赤いスカートはO子が使っていた。O子のアンテナの鋭さと行動の早さに、今更ながら驚かされた。そんな訳で、いつもO子が使ってしまうとか、O子が先にやってしまったとか、他の子が訴えかけて来るようなことはしばしばあった。けれども不思議と、それでO子が友だちから排除されるということはあまりなく、むしろ、O子ちゃんと遊びたいと言う子が多かった。それは、O子と一緒にいるとおもしろいからではないかと思う。いろいろな事によく気がつき、イメージが豊かで、しかも、やりたいと思ったことには自分のペースでとことん取り組む。一見、相反するような両面の魅力を持っているのである。

O子ちゃんておもしろいわね

誕生会

前述の出来事から数日後に、年長組の担任のM先生が、「今日、おもしろいことがあったのよ」と話してくれる。

年長の保育室の、大人の背丈よりも高いところに、てぐす(半透明の釣り用糸)が張ってあるそうで、年長の子どもでも、あまり気がついていない人はいないという。ふと、廊下を通りかかったO子が、何だか不思議そうに、じっと、その線を見上げ、何度かその場で「よいしょ」と言いながらジャンプして行ってしまったというのである。M先生も、他の子どもと視線が違うように思ったと言われた。

ちょうど、あの朝のことがあった直後でもあり、やはり、O子の物を見る視線はユニークなのだなど改めて感じる。

三月の誕生会で、保育者が「ヘンゼルとグレーテル」の音楽劇を見せる。森の中に迷い込んだ二人が、夜になると寝込んでしまい、次の朝目を醒ますと……という場面で天井の電気を消し、幕の内側の上部に取り付けてある色電球を使った。

元の照明に戻ったところで、一番前列に座っていたO子が、ふらふらと立って舞台のほうへ出てきてしまう。「ああ、また落ち着いて見られないのかしら？」と、出演していた私は幕の袖で内心ひやひやする。すると、O子は幕の内側をのぞき込んで見上げている。少し怒りかけていた私は、「ああ、照明のしくみを知りたかったんだわ」と思い、ちょっとO子に申し訳無かったと反省する。と同時に、O子の関心の持ち方と、それをすぐに確かめようとする智慧に感心する。

花みつけ

三月に入り、大変だった三歳児の組の生活にも、穏やかさが感じられる頃となる。

四人の女兒に呼ばれて、ブランコを押しに行く。「私はすべり台」「私はジェットコースター」……とそれぞれのイメージで、私に押すことを要求する。ふと見ると、少し離れたところに梅の花がきれいに咲いている。私が「きれいに咲いているわね」と言うと、N子が「知ってるわよね、おひなさまに飾る花よね」という。おしゃまなN子の勘違いに、ひとりでにやっとしてしていると、N子は「あっちにも、もつときれいなのが咲いてるわよ」と言っ指さす。梅の木の方向に目をやると、その先に、例年より早めに咲いたこぶしの木が目に入る。こぶしは、すぐ隣にそびえるヒマラヤ杉のせいで、ずっと上の方だけにきれいに花を

つけている。私から見てもあんなに高いところなのにと、N子の言葉に驚く。

子どもの視線

私達はよく、子どもの目の高さでという言葉を使う。また、実際に腰を落として背を低くして、保育室を見直して見たりもする。そうすると、さっきまで見えていたものが見えなくなったり、さっきとは違うものがやたらと目に入ってきたりもする。子どもの目の高さの「低さ」に注目することが多い。

いくつかの場面から、O子は他の子に較べて物を見る、とらえる、視点・視線がともユニークなように感じていた。高いところにある物によく気がつく。それは、視野が広いということ、O子が身の回りにある刺激を取り入れる力が豊かなのだ。そして、それがO子がよく遊べるという

ことに結びついていいるのではと思った。

だが一方で、今はたとえ気がついたのは、子どもは見上げることに慣れていいるのだなということである。子どもと話してるとき、あごを突き出して上を向いて話す子どもに気づいて、あわてて腰を落したりすることもあある。大人のサイズで動いている社会の中で、おもしろいな、何だろう、どうしてだろう、と思うと、子ども達は必死で首を伸ばして上を見上げることになるのだろう。

子どもの視線でといっても、奥が深いと今さら感じる。背丈の小さい子どもに合わせて、様々な工夫しながらも、こちらの子想を越えていろいろなことを感度よくキャッチする子ども達のアンテナに学びたいと思う。

空の美しさ

東京の空も、冬の間は思いがけずきれいな

る。O子の様子に感心していたせいか、私自身もこのところ、空を見上げてきれいだなと思うことが多かった。

私の場合、上を向くのは精神状態が比較的良い時かとも思う。冬でなくともいつも、空や雲に目を向けられるような心持ちで、保育の場にいられるようにと思う。

(お茶の水女子大学附属幼稚園)



編集後記

今月から、「子どものいる暮らし―男・夫・父」が始まりました。おとなが子どもとかかわりを持つようになると、それ以前のおとなだけの生活とはがらりと変わってしまいます。そして、「子どもの周りにいるおとな」としての悪戦苦闘が始まります。戸惑いながらのそんな体験があつてこそ、いままで見えなかったいろいろなことが見えてくるのでしょうか。本誌では、さまざまなテーマでそんな経験を書いていただてきました。すると、どうしても、書き手が女性に偏ってしまいがちなことに気づかされます。そこで、このシリーズを企画しました。

どうぞ、ご期待ください。

*

カットを描いて下さっている彌永先生の展覧会が四月にありました。その作品集のおしまいは、「初出『幼児の教育』と書かれていました。そのページをめくっていくと、ろうそくと人魚（震災後の子どもたち）95巻2号）、気持ちよく伸びた木立（「アレルギーとつきあう」同6号）、さらには、会場となった画廊のある公園の植物（「大塚公園」96巻2号）など、本誌にこの二年間に掲載されたカットが次々に現れて、そのときどきの記事までもが思い出され、タイム・スリップしたような不思議なひとときを過ごしました。読者のみなさまに前もってお知らせできなかったことを残念に思いました。

(A)

幼児の教育

第九十六巻 第七号

(一九九七年七月号)

定価四六〇円（本体四三八円）

発行 平成九年七月一日

編集兼発行人 田代和美

発行所 日本幼稚園協会

〒112東京都文京区大塚二―一―

お茶の水女子大学附属幼稚園内

印刷所 図書印刷株式会社

〒108東京都港区三田五―二―

発売所 株式会社 フレーベル館

〒113東京都文京区本駒込

六一―四―九

☎〇三―五三九五―六六一三（営業）

☎〇三―五三九五―六六〇四（編集）

振替 〇〇―一九〇―二一九六四〇

☆ 本誌ご購読のご注文は発売所フレーベル館にお願いいたします。

☆ 万一、乱丁・落丁などがございましたら、おとりかえいたします。

おはなしマジック

—妖精から贈られた魔法の粉—



だれでもできるやさしい手品を紹介。
お誕生会やいろいろな行事の集会など
に効果のあるマジック特集。

しかもマジックがおはなし形式で構成
され、子どもはもちろん大人にも十分
楽しめる。

●内容

三匹のこぶた	ゴンドらごん
だらんだらん	三日月のペンダント
ヒツジとオオカミ	にんじんきらい?
ぴっぴっぴ	ジャックと豆の木
星に願いを	王子ミグルーシャ

あんざき こういち 著

B5判 96頁 定価 本体2,200円+税

キンダーブックの
フレーベル館

フレーベル館創業90周年記念出版

21世紀の保育を見つめて、今、保育の基本を問い直す

幼稚園教育要領や保育所保育指針の中で示されている「保育の基本」は、さまざまな形に受容され実践に移された。しかし、そこに誤解に基づく混乱はなかったか。本シリーズは、具体的な事例を通してその混乱をただし、あるべき保育の姿を提案します。

保育の基本〈全6巻〉



- ◆第1巻 環境を通しての保育とは
- ◆第2巻 生活と遊びを通しての保育とは
- ◆第3巻 個と集団を生かす保育とは
- ◆第4巻 自由の中で規律が育つ保育とは
- ◆第5巻 発達に合わせて援助する保育とは
- ◆第6巻 総合的指導による保育とは

編集委員

森上史朗（青山学院大学教授）
高杉自子（子どもと保育総合研究所）
今井和子（東京成徳短期大学助教授）
後藤節美（別府市・石垣幼稚園長）
田中泰行（東京都・向南幼稚園長）
渡辺英則（横浜市・港北幼稚園副園長）

最新刊

●今特に問題となっていることを各巻のテーマに

保育現場で、今特に問題となっていること、誤解されていること、混乱していること、見直されつつあることなどを取り上げ、各巻のテーマにしています。

●子どもに寄り添う保育を

「子どもから」という発想を軸に、子ども理解、一人一人を見る、集団生活の意味や表面的な行動の奥にある意味を見る、ということを考えつつ、子どもに添った保育のあり方を考えていきます。

●これからの保育への提案

次回に予想される教育要領の改訂をも視野に入れながら、これからの保育のあるべき姿を考察し、どう実践していったら良いかを事例をもとに具体的に提案していきます。

判型/A5判・頁数/各巻216頁 セット定価：本体12,000円＋税

キンダーブックの
フレーベル館